

平安和文会話文における連体修飾節連体形と 連体形終止連体形の比較分析

土岐留美江

日本語教育講座

The Analysis of Adnominal Clause and Final-Attributive in Heian Japanese Conversational Texts

Rumie TOKI

Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya448 - 8542, Japan

ABSTRACT

This paper examines lexical-semantic properties of verbs, adjectives and auxiliaries appearing in adnominal clauses in comparison with those in final-attributives (sentences ending in adnominal form) in colloquial Heian Japanese. It is revealed that there is a certain correlation between the lexical semantics and the syntax of adnominal-ending form.

The specific findings are as follows:

- (1) In adnominal clauses verbs of motion/change, verbs of emotion/thought/perception and verbs of existence are most frequent, in descending order, while in final-attributives verbs of emotion/thought/perception, verbs of motion/change, and verbs of existence are most frequent, in descending order.
- (2) In adnominal clauses all adjectives types (emotional, attributive and intermediate) are found, while in final-attributives only emotional (often with negative connotation) adjectives are used.
- (3) No particular correlations are found between the frequency and the lexical meanings of auxiliaries in adnominal clauses. In final-attributives, emotion/thought auxiliaries, past/perfective auxiliaries, inference auxiliaries, negative auxiliaries, assertive auxiliaries are most frequent, in descending order.

1. はじめに

古代日本語の連体形終止文の特質については、多くの先行研究が注目し、小池(1967)、山内(1959, 1963, 1964, 1970, 1992, 1997, 2003)など、様々な観点から多くの分析がなされている。また、尾上(1982)など、準体句の機能との関連から、連体形終止の表現性の出自を原理的に説明しようとする試みもなされてきた。

本来、連体形はその名の由来の如く、体言に連なる連体修飾節を導くことを本質的な機能とする活用形であり、それ故に、そのような本質的な機能からは一見、説明しがたい文終止としての連体形終止の特異性が注目されてきたのである。

連体形終止を、終止形終止との比較や他の連体形の結びを持つ係り結びとの関連で考察する研究は、近藤(1986, 2000)、Iwasaki(2000)など、従来からな

れている。土岐(2005)でもそのような視点から連体形終止文の特徴を用例分析によるデータを用いて明確化することを試みた。

しかし、本来の機能である連体修飾節に現れる連体形と、連体形終止文に現れる連体形との関係については、管見の限りいまだ分析はなされていない。連体形終止と連体形による係り結び終止とが「なぜともに「連体形」で終止するのか、という問題を考える上で、従来、このような観点からは比較の対象にされなかった連体法連体形の特徴を整理してみる必要がある。

本稿では、平安和文資料の会話文中に現れる、連体修飾節として機能している連体形の用例と、連体形終止文に現れる連体形の用例とのデータ比較分析を行い、古代日本語に特徴的な連体形終止との関係で連体法連体形の特徴を洗い出すことを目的とする。

連体形終止の用法は地の文と会話文とで大きく異なることが先行研究により指摘されており、土岐(2005)

では会話文中のデータに限定して考察を行った。これらとの比較分析上、本稿でも会話文中のデータに限定して考察を進めていく。

2. 調査対象資料

本稿で分析対象とした資料および使用テキストは以下の通りである。

【連体形終止】

『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『堤中納言物語』『落窪物語』『源氏物語』『宇津保物語』：宇津保物語はおうふう「うつほ物語全」、大和物語は岩波旧日本古典大系本、その他は岩波新日本古典大系本による。

【連体法連体形】

『源氏物語』岩波新日本古典大系本

連体法連体形のデータは源氏物語のみに拠っており、資料数に偏りがあるが、連体形終止と連体法連体形ではテキスト上に現れる頻度が異なり、連体法連体形は出現頻度が高いため、採集された用例の総量は連体法連体形が上回る。

諸本の校異で当該の形態に異同があるものはすべて対象から除外した。

3. 分析対象形式

本稿の分析対象とした連体形終止の用例はすべて平叙文中のものである。疑問文や反語文はいわゆる連体形終止とは用法的に大きく異なるため除外してある。

一方、連体法連体形の用例は主節の文のモダリティに関わらずデータとして採用してある。文のモダリティによる何らかの相違があるか否かという点は、今後、吟味していく必要がある。

また、連体形終止にヨ、ヤ、カシ、カナなど、詠嘆的表現性を持つ文末間投助詞が後接している場合は、連体形のみによる連体形終止とは性質が異なる可能性があるため除外する。

「～給ふ」、「～侍り」、(ラ)ル、(サ)スなどの待遇表現の補助動詞、助動詞が後接している場合はすべて分析対象に含めてある。このような待遇表現が入る場合と入らない場合とで何らかの相違があるか否かという点についても、今後、吟味していく必要がある。

4. 分析

4.1. 助動詞を含まない動詞連体節

土岐(2005)では、終止形終止と連体形終止では、述語動詞の意味タイプ別分布が大きく異なることを明らかにした。終止形・連体形異形の活用語と、形態からは活用形の判別がつかない終止形・連体形同形の活用語とに分けてまとめたものが、次の表1とグラフ1である。終止形終止文では存在詞がおよそ70%と最も高く、連体形終止文では感情・思考・知覚動詞がおよ

そ60%と最も高い。感情・思考・知覚動詞のほとんどが一人称主体のものであり、連体形終止文には当該情報の確定権が限定される傾向が明らかに認められた。一方、終止形終止文に最も顕著である存在詞は、外面的に第三者からも状態が把握可能であるという意味特徴を持ち、終止形終止文にはニュートラルな状況描写文としての傾向が認められた。

連体節連体形について、同様にまとめたのが、次の表1 およびグラフ1 である。名詞が続く連体法の場合は、終止連体同形活用語か終止連体異形活用語かの違いは、終止法の場合ほど顕著ではない。ともに、1 動作・変化動詞が最も多く、2 感情・思考・知覚動詞がその次で、3 存在詞が最も少ない。

これは終止形終止とも連体形終止とも異なっているが、終止・連体同形活用語の終止法の場合に近似しており、終止形終止と連体形終止の中間的様相を示している。

表1 終止文述語動詞意味タイプ別分布

	終止形	終止・連体 同形	連体形
動作・変化	41 (21.4)	192 (62.7)	19 (30.6)
存在	134 (69.8)	40 (13.1)	6 (9.7)
感情・思考 知覚	17 (8.9)	74 (24.2)	37 (59.7)
計	192 (100.1)	306 (100.0)	62 (100.0)

グラフ1

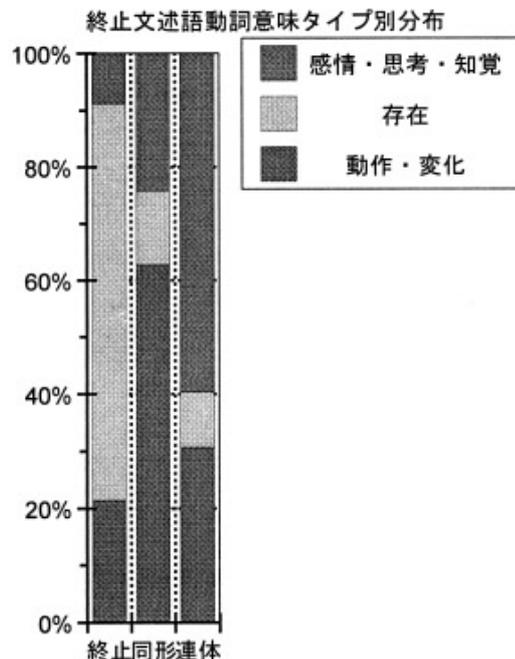
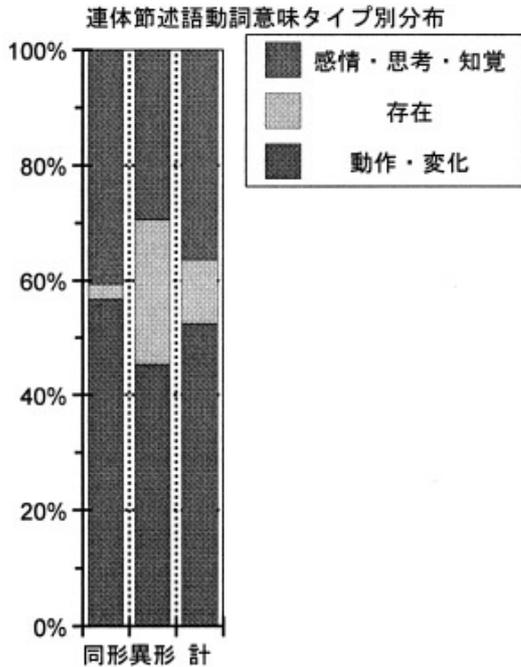


表1 連体節述語動詞意味タイプ別分布

	終止・連体 同形	終止・連体 異形	計
動作・変化	491 (56.8)	240 (45.4)	731 (52.4)
存在	22 (2.5)	133 (25.1)	155 (11.1)
感情・思考 知覚	352 (40.7)	156 (29.5)	508 (36.4)
計	865 (100.0)	529 (100.0)	1394 (99.9)

グラフ1



4.2 助動詞を含まない形容詞連体節

終止法の場合、述語が形容詞の場合にも、連体形終止をとりやすいものとそうでないものとの一定の傾向が見られることを土岐(2005)で明らかにした。形容詞の意味について、ABCの類型を立てて考察した吉田1995にならい、土岐(2005)でのデータをまとめなおしたものが次の表2と表2である。A情緒的、C属性的、その中間的なBという形容詞の三つの類型に、更に評価的意味を含むものについて、プラス評価は、マイナス評価は符号ナシ、プラス、マイナスどちらの意味合いも含まれる場合は、という本稿独自の符号を付した。終止法の用例は、便宜上、終止形終止、連体形終止、ゾ、ナムの結びになっている係り結びの全ての場合の合計が6例以上見られたものの集計値である¹。

全体的に、Aの情緒的形容詞が現れる率が圧倒的に高いのであるが、その中でも、連体形終止はB(中間

表2 形容詞・連体形終止総数順

形式	総数	類型	評価
なし	3	B	
苦し(心苦し)	2	A	
わづらはし	2	A	
あぢきなし	1	A	
あやし	1	A	
いとほし	1	A	△
恐ろし	1	A	
かたし	1	A	
かなし	1	A	△
心憂し	1	A	
つゝまし	1	A	△
良し	1	A	○
わびし	1	A	
わりなし	1	A	

表2 形容詞・終止形終止総数順

形式	総数	類型	評価
なし	136	B	
良し	28	A	○
あやし	24	A	
かしこし	20	A	○
いとほし	17	A	△
見苦し	16	A	
苦し(心苦し)	15	A	
悪し	10	A	
かたじけなし	9	A	○
遅し	8	B	
かひなし	8	A	
はづかし	8	A	
やすし(心やすし)	8	A	○
わびし	8	A	
あぢきなし	7	A	
いみじ	7	B	
むつかし	7	A	
かたし	6	A	
心憂し	6	A	
〜にくし	6	A	
わづらはし	6	A	
恐ろし	5	A	
かなし	3	A	△
ありがたし	2	A	○
うれし	2	A	○
つらし	2	A	

的)の「なし」以外はすべてA(情緒的)形容詞であり、とりわけ情緒的形容詞に偏っている。また、評価の意味合いで見ても、明らかなプラス評価のものは「よし」一例しか見られず、マイナス評価に偏る傾向がある。

そのような傾向は、終止形終止の場合は緩和され、類型では「なし」以外にも「遅し」「いみじ」などのBの中間的形容詞が現れる。また、評価の意味合いについても、「よし」をはじめとして「かしこし」「かたじけなし」「(心)やすし」「ありがたし」「うれし」などのプラス評価を含むものが散見されるようになる。

一方、連体節連体形として現れる形容詞の総数6例以上のものについてまとめたのが次の表2である²。

表2 連体節形容詞総数順(1/2)

形容詞	総数	類型	評価
なし	250	B	
深し	55	C	
はかなし	53	A	
あやし	46	A	
かたし	44	A	
苦し	36	A	
いみじ	33	B	
近し	28	C	
心やまし	27	A	
よし	24	A	○
をさなし	24	A	
かなし	23	A	△
若し	23	A	
かしこし	21	A	
軽／＼し	20	A	
憂し	19	A	
くちをし	19	A	
をかし	16	A	○
すき／＼し	16	A	
悪し	14	A	
かひなし	14	A	
高し	14	C	
ありがたし	13	A	○
心ぼそし	13	A	
頼もし	12	A	
つらし	12	A	
めでたし	12	A	○
わづらはし	12	A	
疎し	11	A	
うれし	11	A	
むつかし	11	A	
多し	10	C	
やむごとなし	10	A	○
ゆゆし	10	A	
よろし	10	A	○

用例の集計基準に若干の違いはあるが、連体節の場合には、終止法と比較して形容詞の総数も種類も格段に多い。典型的には、終止法の場合にはまったく見られなかった「深し」「近し」「高し」「多し」などのCの属性的形容詞が上位にいくつも含まれており、更に、評価の意味合いの点でも「よし」「かしこし」「をかし」「ありがたし」「めでたし」「やむごとなし」など、明らかなプラス評価のものが上位に散見される。

同じ連体形でも終止法の場合と連体法の場合では、明らかに出現傾向が異なっており、意味的類型や評価の意味合いに偏りのある連体形終止に対し、連体節の連体形はいずれの点でも偏りがなく、比較的自由に現れている。

表2 連体節形容詞総数順(2/2)

いはけなし	9	A	
かたじけなし	9	A	○
長し	9	C	
見ぐるし	9	A	
めづらし	9	A	○
重し	8	B	
かたはらいたし	8	A	
くやし	8	A	
こと／＼し	8	A	
恋し	8	A	○
なつかし	8	A	○
にくし	8	A	
はか／＼し	8	B	
はづかし	8	A	△
わろし	8	A	
うしろやすし	7	A	○
たふとし	7	A	○
ところせし	7	B	
とほし	7	C	
古し	7	C	
あいなし	6	A	
いとほし	6	A	△
おそろし	6	A	
おほけなし	6	A	
さかし	6	A	
しげし	6	B	
親し	6	B	○
涼し	6	B	
たい／＼し	6	A	
つゝまし	6	A	△
ひが／＼し	6	A	
便なし	6	A	
めざまし	6	A	
めやすし	6	A	○
らうたし	6	A	
わりなし	6	A	

4.3. 助動詞を含む連体節

受け身と自発の(ラ)ル、使役の(サ)スなど、待遇表現以外の助動詞が現れる場合について総数が多い順にまとめたのが以下の表3およびグラフ3である。

助動詞が現れる場合、節述語の中心となる品詞は動詞、形容詞、名詞と多岐に渡り、また、複数の助動詞が相互に接続するケースも多いが、ここでは土岐(2005)と同様に、述語の中心的品詞の種別は問わず、また、複数の助動詞が現れる場合は最節末のもののみを取り上げる。

表3から、終止・連体同形の助動詞ム、ケム、ラム、マシ、ジを除き、終止法で現れた助動詞のデータを加えて終止法と連体法の出現総数に占める連体法の割合をパーセンテージで示したものが次頁の表4およびグラフ4である。

連体法の比率は、サス ル マホシ マジ タリ リ ベシ キ ス ラル ズ ツ 体言ナリ ケリ 終止ナリ ヌ メリ 連体ナリ、の順に高い。

土岐(2005)では、連体形終止、終止形終止、結び

に連体形をとるゾ、ナム係り結びにおいて、連体形終止の比率は、助動詞の表す意味により、以下の五つの意味類型に従って1 > 2 > 3 > 4, 5の順に連体形終止率が高く、きれいな序列をなすことを示した。

1. 感情・思考表出(ル,ラル,マホシ)
2. 過去・完了(キ,ケリ,ツ,ヌ,タリ,リ)
3. 推量(終止ナリ,ベシ,メリ,(マジ))
4. 否定(ズ,(マジ))
5. 断定(体言ナリ,連体ナリ)

しかし、連体法の連体形では、例えば同じ感情表出の自発のル(92.3%),とラル(55.6%)でも、比率に隔たりがあり、過去・完了のタリ・リ(およそ74%)は比較的比率が高いが、ケリ(34.6%)は低く、また、推量のマジ(74.8%)とベシ(65.0%)は比較的比率が高いが、終止ナリ(32.4%)は比較的低いなど、同じ意味グループに属していても、連体法の現れる比率には相関性が認められない。同様に、使役のス(57.1%)とサス(100.0%)も比率に隔たりがあるが、サスは用例が1例のみであり、サスも用例総数が一桁しかな

表3 助動詞総数順

形式	総数
ズ	557
キ	433
ベシ	431
ム	414
体言ナリ	407
タリ	345
リ	193
ケリ	178
マジ	113
ツ	97
ヌ	56
メリ	41
ケム	35
ラム	28
マホシ	17
終止ナリ	12
ル	12
ラル	10
マシ	4
ス	4
ジ	2
サス	1
連体ナリ	1

グラフ3

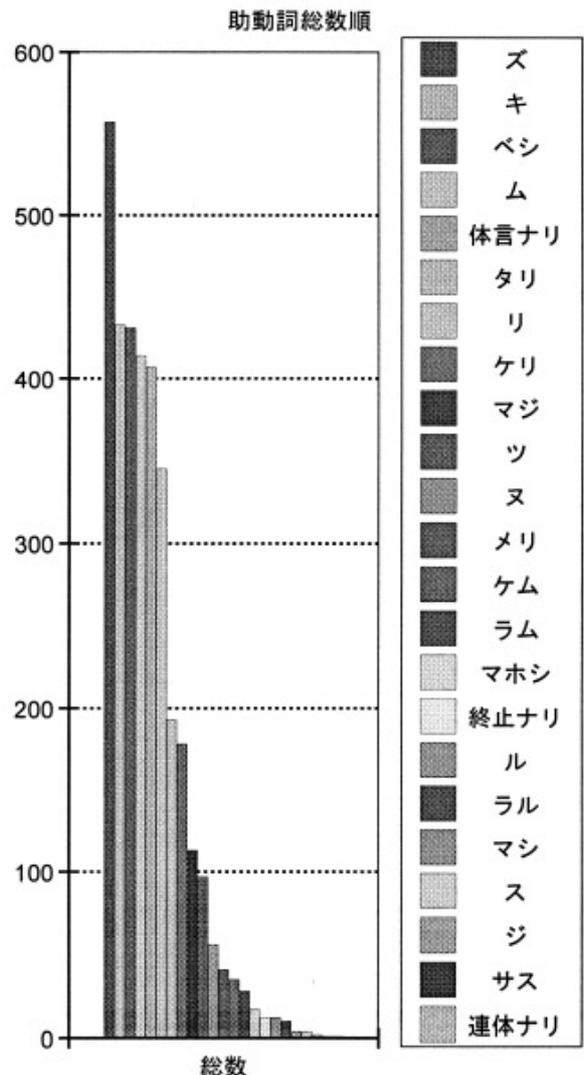
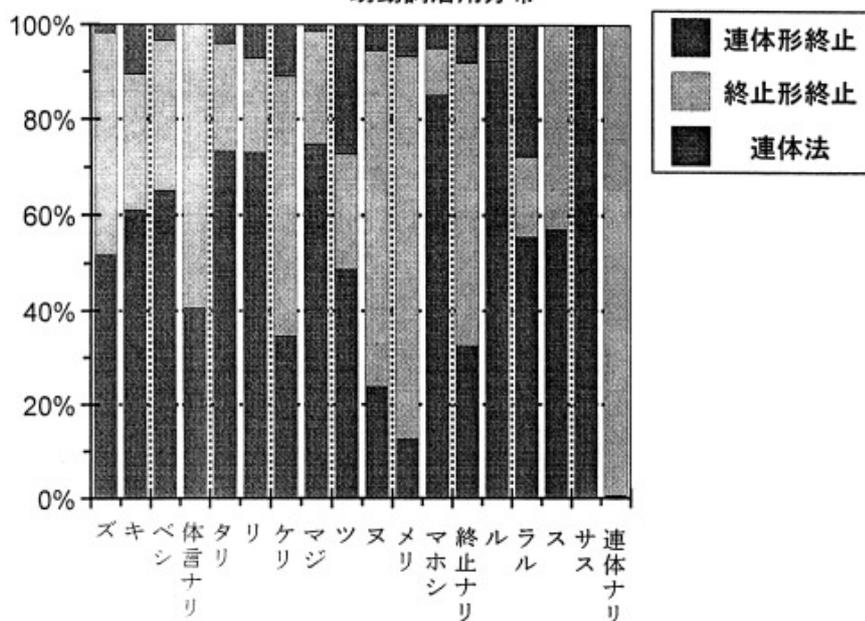


表4 助動詞活用分布

形式	連体法	終・終止	連・終止	計	連体法率
ズ	557	502	19	1078	51.7
キ	433	203	75	711	60.9
ベシ	431	209	23	663	65.0
体言ナリ	407	597	0	1004	40.5
タリ	345	106	19	470	73.4
リ	193	52	19	264	73.1
ケリ	178	280	57	515	34.6
マジ	113	36	2	151	74.8
ツ	97	48	54	199	48.7
ヌ	56	167	13	236	23.7
メリ	41	262	22	325	12.6
マホシ	17	2	1	20	85.0
終止ナリ	12	22	3	37	32.4
ル	12	0	1	13	92.3
ラル	10	3	5	18	55.6
ス	4	3	0	7	57.1
サス	1	0	0	1	100.0
連体ナリ	1	174	0	175	0.57

グラフ4

助動詞活用分布



いため、連体法の比率を論じるには信頼性が低い。

また、否定のズは51.7%と比率的に中間的位置に属し、比率が最下位だった連体形終止のときの様相とは明らかに異なっている。

5. まとめ

本稿での分析結果を以下にまとめる。

古代日本語会話文中の連体修飾節に現れる連体法連体形のデータを分析した結果、以下のような特徴が観察される。

1. 助動詞を含まない動詞連体節の場合、現れる動詞の意味タイプは、
 - 1 動作・変化動詞
 - 2 感情・思考・知覚動詞
 - 3 存在詞
 の順に多い。
2. 助動詞を含まない形容詞連体節の場合、現れる形容詞の意味類型は
 - A 情緒的
 - B 中間的
 - C 属性的
 のすべてが現れる。

また、評価的意味を有する形容詞の場合、
 プラス評価
 マイナス評価
 の両方が現れる。
3. 助動詞を含む連体節の場合、
 1. 感情・思考表出
 2. 過去・完了
 3. 推量
 4. 否定
 5. 断定

の意味類型グループ間での序列は認められない。

1については、感情・思考・知覚動詞が圧倒的に多い連体形終止とも、存在詞が圧倒的に多い終止形終止とも異なっており、いわば両者の中間的様相を示している。

2については、情緒的形容詞の中でも、特にマイナス評価的意味合いを含むものに偏っている連体形終止を筆頭に、終止形終止、連体節連体形の順で偏りが薄まっていき、広く自由に形容詞が現れるようになると解釈出来る。

3については、意味類型により出現率に明確な序列が認められた連体形終止とは大きく異なり、連体節は、助動詞の意味類型とは無関係に形成されていることを示している。これは2の形容詞の場合の分析結果とも相通じるものである。

以上の分析から、意味的に分布の偏りの少ないニュートラルな文法機能形式と言える連体法連体形に対し、連体形終止連体形が、同じ連体形という形をと

りながら、強い意味的偏りを有する特徴的な用法であることが、用例データの分析により裏付けられたと言える。

今後は、これらの分析結果に、準体法連体形の実態も加えて比較考察を行い、古代日本語連体形の用法の全体像を明らかにすることが課題である。

注

1. 総数5例以下のものの語形を以下に示す。

(5例のもの)

あさまし、あやうし、多し、おもしろし、(～)がたし、くちをし、さはがし、頼もし、近し、にくし、ものぐるをし、ゆゆし

(4例のもの)

暑し、かしがまし、かたはらいまし、わりなし

(3例のもの)

おぼつかなし、ことごとし、さうざうし、(ところ)せせし、まがまがし、まだし、みにくし、まざまし、をかし

(2例のもの)

うつくし、うるさし、つつまし、なめし、悩まし、～にくし、めづらし、めでたし、ゆかし、わるし

(1例のもの)

忙し、痛し、いぶせし、いまめかし、うしろめたし、うらやまし、うるはし、おこがまし、重し、からし、軽々し、かるし、暗し、ごとし、寒し、しれがまし、しろし、たいだいし、たどたどし、たふとし、鳴り高し、名立たし、ねたし、はかなし、ひとし、(罪)深し、ものし、やさし、よろし、若々し

2. 総数5例以下のものの語形を以下に示す。

(5例のもの)

浅し、あさまし、うらめし、おどろおどろし、おぼつかなし、こよなし、少なし、すさまじ、若々し、

(4例のもの)

あぢきなし、あはただし、あはつけし、いまめかし、うしろめたし、うつくし、うるさし、うるはし、おもしろし、くだだし、くはし、さはがし、せばし、はしたなし、古めかし、むくつけし、むつまし、むなし、もどかし、らうがはし

(3例のもの)

あふなし、いかめし、いたし、いとはし、うれはし、おとなし、面立たし、かけかけし、かたくなし、からし、心づきなし、心なし、たぐひなし、たけし、ちいさし、つきなし、つたなし、つれなし、なをなをし、にくし、ねたし、久し、広し、まばゆし、まめまめし、乱りがはし、ものうし、らうらうじ、ゆかし、をしげなし

(2例のもの)

あだあだし、あたらし、暑かはし、荒し、荒まし、あやなし、いつかし、いぶせし、いやし、疑はし、うひうひし、おれおれし、かるし、暗し、心ごはし、心許なし、さうざうし、しるし、情けなし、馴れなれし、ぬるし、はげし、逢けし、短し、弱し、女し

(1例のもの)

あえなし、あきたし、暑し、あなづらはし、あはあはし、あ
まねし、いぎたなし、忙し、いち早し、いとみなし、いぶか
し、言ふかひなし、薄し、うとまし、うれたし、うれはし、
をし、同じ、おぼえなし、かひなし、限りなし、かどかどし、
神がうし、きたなげなし、きたなし、きびし、きらきらし、
くわし、下種げすし、けだかし、ここし、心やまし、ことご
とし、好まし、こはごはし、強し、さうざうし、さがなし、
定めなし、しどけなし、執念し、痴れじれし、白し、すくす
くし、すごし、たいだいし、たのし、頼もしげなし、たぐひ
なし、つきづきし、露けし、なほなほし、なまめかし、悩ま
し、にぎははし、のどけし、晴ればれし、人ひとし、ひとし、
ほけほけし、まがまがし、まぎらはし、貧し、まだし、乱れ
がはし、道々し、醜し、むねむねし、めかし、ものものし、
ものし、もの狂をし、やさし、ゆへゆへし、よしなし、よだ
けし、わびし、をさなし、をもだたし、をし

主要参考文献

- 尾上圭介(1982)「文の基本構成・史的展開」森岡健二他編『講座日本語学2 文法史』1 19
同 (2001)『文法と意味』くろしお出版
小池清治(1967)「連体形終止法の表現効果 今昔物語集・源氏物語を中心に」『国文学言語と文芸』54, 12-21
近藤泰弘(1986)「結びの用言の構文的性格」『日本語学』

5 2, 22-30

- 同 (2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
土岐留美江(2005)「平安和文会話文における連体形終止文」『日本語の研究』1 4, 16-30
山内洋一郎(1959)「院政期の連体形終止」『国文学攷』21, 240-250 (広島大学国語国文学会)
同 (1963)「奈良時代の連体形終止」『国文学攷』30, 33-41 (広島大学国語国文学会)
同 (1964)「助動詞「うず」について 連体形終止の異例として」『広島大学文学部紀要』23 3, 125-152
同 (1970)「下二段「たまふ」の終止法 連体形終止の観点から」『国文学攷』54, 55-58 (広島大学国語国文学会)
同 (1992)「平安時代の連体形終止」井上親雄・山内洋一郎編『古代語の構造と展開』25-44 (和泉書院)
同 (1997)「助動詞「うず」の連体形終止について 中世における終止形の残存」『文教国文学』37, 1-8
同 (2003)『活用と活用形の通時的研究』清文堂出版
IWASAKI, Shoichi (2000) "Suppressed Assertion and the Functions of the Final-Attributive in Prose and Poetry of Heian Japanese". Susan C.Herring, Peter van Reenen and Lene Schosler (eds.) Textual Parameters in Older Languages, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 237-272
(平成19年9月14日受理)